

船 団

第118号

特集

俳句が好きでない、
俳人も。

やの かよこ

母さんとこの道踏んでうまごやし
単線に昼下がりの風金鳳花
嘶家のまくらとぼして夏に入る
空つぼの巣を抱き夏は訪れる
合鍵が合わず会えずに夏帽子
助手席にまどろんでいる夏の海
錆色の余部鉄橋越しの夏

藪ノ内 君代

人体に腰春風に曲がり角
空白はいいなチューリップ咲いている
桜咲くいつもの道の橋わたる
世界地図広げたままにうぐいす餅
本日のメインディッシュにれんげ草
噴水に待ち合わせしてカバへ行く
草笛のあなたが好きだ桃子さん

● 会員作品 ●

山岡 和子

枇杷熟れる黄瀬戸の皿が好きだから
しゃぼん玉犬の鼻まであと二ミリ
杜若きのうゴッホに会ってきた
夏はじめ藻屑舐屑踏んでいく
肝っ玉かあさんだったあつぱつぱ
母がいた大根の炊いたんといた
ふるさとへ雲雀の空へ行ってきた

山口 久子

ロボットの背中叩けば春がポン
ビル掃除のゴンドラのオレ初夏の風
ミサイルの中身は夏のちぎれ雲
千年の原生林とハグの初夏
母と子のしばし休戦わらび餅
人生の春のどこかで微調整
春一番あの世あったとあの世から

山田 まさ子

広辞苑第七版のがつつり冬
崖つぶちのキスの金色水仙花
頭痛持ち同士の散歩青木の実
黄砂降る自転車は時速二十キロ
御母堂の乾坤一擲キャベツ切る
泉へとカロリナポプラ光る道
オーボエのラの音流れ五月かな

山中 正己

空白のページ埋まらず花疲れ
春昼に委ねし寡婦の掌の湿り
春惜しむ万年筆の孤独感
寝そびれし八十八夜の壺に耳
「喫茶去」の扁額仰ぐ四条初夏
ひきがへるこころ構へのあるやうな
揚羽いま毛虫のころを懐しむ

● 会員作品 ●

山本 佳代

猫はいい猫はもういい猫の恋
さくらさくらはらひらふらへらほら桜
竹の子の皮はぐ赤子沐浴す
空豆の花こっちを見てるまだ見てる
緑さす前から二番目ほらっあの子
眠たげな蚕豆座してご立腹
花器の百合雄しべ取られて黙秘する

山本 紫苑

点眼の口あく男春隣 おのこ
万華鏡回して春の曼荼羅図
春雷や父のげんこの音がする
釜飯のふかふか湖国五月来る
入園式小さな悪魔ぞろりぞろ
献血をしてみようかな土筆出ず
水馬ついついときて兄思う

つじ あきこ

水路橋くぐるたつぷり春の水

坊様の大股小股雲雀東風

春の鴨扁平足でぺたぺたと

大楠のどこに作るう鳥の巢

つばめつばめリフォームして暮らす

若葉風転がり落ちた西行さん

夏帽子片方だけのイヤリング

津田 このみ

さくらんぼ本当のこと言いそうに

半夏生写真の妻の麗しく

京都市行き快速青葉また青葉

片蔭に蹲るもの本能寺

皆頼む豚盛定食南風

青鳶は抱くよ親鸞さんの寺

あいつちのふっと途切れし苔の花

●会員作品●

津波 古江津

春昼のドリアの塩がきつすぎる

モツツアレラ糸ひいている遅日かな

ポップコーン散らばっているこの世の

春

シャツトダウンしてから奔る春の水

亀鳴いてオムレッツうつらうつらかな

ファミレスに女ばかりの暮の春

坪内 稔典

紫木蓮三点リーダー多すぎる

午前九時蟻と肝胆相照らす

蟻AとPは迅速雨上がる

あの時も虞美人草の午後だった

心だがポピーになって戻らない

あの日からブルーベリーの好きどうし

雨上がるブルーベリーを三粒ほど

中原 幸子

びわ熟れる見えないけれど宇宙船
早春のジェラート安達太良山仰ぐ
すみれ咲くわたしのとげのむらさきに
四月馬鹿プッチンプッチンホッチキス
極楽やなあどぶらんこにお尻
初夏の爪切る音のほの白く
節電を出て炎天へ浮気もん

梨地 ことこ

花氷復讐劇の始まりぬ
小さくてクラシックで春月で
狂想も平常もゆく夜桜へ
これという理由はないの豆の花
ヤダ、った事このさ緑へ川音へ
青い薔薇旧知のようにアダルトマダム
どくだみの十字に零る陽も十字

● 会員作品 ●

南北 佳昭

脱走す懸命にノタノタ青虫
サツカーボール蹴るや五月の空の青
朝刊のインク匂えり夏来る
匙なめて氷菓の山に立ち向かう
ただ一輪剪るや兜太へ赤い薔薇
登りつめ薔薇の黄色に染まる虫
万緑の岬を遠く難破船

西村 亜紀子

百度石三度まわって青蜥蜴
見返りの桐の花咲く雨もよう
金魚の墓ハムスターの墓ありし家
チャールストン金魚になつてゆく女
こんな所に昭和のポストハナミズキ
葛切りや鈴の音する銀の箸
美丈夫の口一文字競べ馬

原 ゆき

競べ馬埒に押し合う人の中
球体のなかに球体春眠し
近々と白馬のにおい春の闇
すかんぽを噛んでは風の品定め
広告の巨大なえがお鳥曇
キャベツ語をつぶやき眠りゆく胎児
ビロードの想念を持つ守宮かな

阪野 基道

夏闇の底まぼろしの馬つなぐ
たんぽぽや図録まくらにふいーれんつえ
押しくらをむぎゆつと腰から梅雨に入る
はんざきやぽつかり浮いてアヴェ・マリア
浮いてこい浮かない人はほつとけない
水のないプールの底のとげとげし
短夜の夢のあとさきジムノペディ

● 会員作品 ●

東 英幸

きりぎりす老年励まし鳴きやまず
父の郷百羽のカラス兜太の死
庭中に早咲きの梅兜太死す
切り株の匂い永劫兜太の死
虫喰いの葉つばが一枚兜太の死
兜太に倣う朝のバナナとコーヒート
信濃宿兜太は男根をしみじみ

火箱 ひろ

乙女椿一輪挿しに兜太逝く
たこ焼の春は名のみ紅生姜
春が来たトイレに飾る絵をさがす
ピカソもう古いとほざく目刺しかな
半生の目刺し半生のおじいさん
単眼鏡買おうか亀が鳴いている
海ゆかば海底駅のあり海市

陽山 道子

ダンス部の足の筋肉卒業す
葉桜の丸いポストがここよここ
れんげれんげ祖国の記憶ありますか
ひと絶えて茅花流しの午後になる
初夏の返しそびれた白い石
初夏のじゃんけんぼんの肘きれい
青葉雨赤いシャベルが立ったまま

福岡 貴子

緑雨して抜歯のくちびる閉まらない
邸宅の跡地分割春の雪
冴返るどうやら女性車両らし
蛇穴を出るブレスレットするり解く
花吹雪たしか菩薩に会ったよう
啄木忌右手でほぐす左肩
緑さす暮しに風の設計図

● 会員作品 ●

ふけ としこ

落ちついてとにかく落ちついて新茶
牡丹の寺から流れくるけむり
粽解く亀も蛙も鯉もぬて
筍の伸びてくしやみの続けざま
竹の子の空を目指せば今日の雲
朴若葉飛行機雲が交差して
ほととぎす朴は葉裏をひるがへし

藤 かおり

はつ夏の風カピバラに子が五つ
春の風肌にピチピチシルキー湯
ガリ版の文集開く花ひらく
乗り合わせ新車でめぐる花の里
ころころと笑ったままの落椿
五分咲きの宇宙帰りの桜かな
ダヴィンチの絵画の前や花の昼